

#### 第4節 小結

倉園A遺跡は、宮崎県串間市との県境に近い山間部に位置する。そのような立地ながら、縄文前期後半から弥生初頭を中心とする時期の遺物が多量に出土した。

その中には、西北九州からの搬入品の可能性が高い、胎土に滑石を含む春日式南宮島段階もあり、当時の広域的な地域間交流の一端もうかがうことができた。また、切目石錐や石刀状石製品のような、県内では出土例の希少な遺物も認められた。

本遺跡の眼下を流れる前川は、四万十層群が構成する急峻な山岳地帯（鰐塚山地）を源とする。この急峻な山岳地帯は、志布志市と串間市との県境をなし、前川に沿って両市をつなぐ県道3号線が通っている。

この道は、縄文時代においても主要な交流ルートであった可能性があり、倉園A遺跡（縄文早期前半においては倉園B遺跡）はこのルート沿いの拠点的な遺跡であったと考える。

このルート上を縄文時代の人々が往来した結果、倉園A遺跡に多量の遺物が残されたのであろう。

#### 第5節 市内発見の精神文化関連石器について

##### －独鉛状石器の紹介－

倉園A遺跡では、環状石斧や石刀状石製品が出土している。これら同様の精神文化関連石器は、市内でも幾つか確認されてきた。

それは、志布志町出口A遺跡の独鉛状石器（梅原1994）、志布志町中原遺跡の円盤状石製品と軽石製石棒、有明町次五遺跡の異形石器（志布志市教委2018）、次五遺跡と松山町山ノ田遺跡のトロトロ石器（松山町教委2005）である。また最近、志布志町内の市指定建造物内から独鉛状石器が1点発見された。

今回、出口A遺跡の独鉛状石器2例の再実測を行う機会があった。そこで、出口A遺跡2例の再報告と新発見資料の報告を行いたい（第94・95図1～3）。

1・2は、出口A遺跡（志布志町帖）で出土したものである。昭和17（1942）年、畑地を田地へ改変する際に、地下4～5尺（約1.2～1.5m）の所から偶然掘り出されたものである（梅原1944）。

1：全長22.7cm、体部最大幅5.3cm、くびれ部幅3.6cm、体部最大厚3.0cm、くびれ部厚2.5cm、重量490gを測る。石材は、肉眼観察によれば頁岩の可能性があるが、石英片岩との報告もある（梅原1944）。

体部がハ字状に大きく湾曲し、中央上面に一対の突起がある。突起を作出することでくびれを成している。両体部先端は鋭くとがっている。体部断面は円形に近い。

全面を丁寧に研磨して成形しており、比較的長めの擦痕が確認できる。体部は体部の軸に対して平行する横方向、くびれ部は縦方向の研磨である。

中央突起先端ともに剥離痕が認められる。ただし、使用による剥離かどうかは判断できない。

2：全長22.9cm、体部最大幅4.9cm、くびれ部幅3.7cm、体部最大厚2.4cm、くびれ部厚2.0cm、重量395.0gを測る。

石材は、肉眼観察によれば頁岩の可能性があるが、石英片岩との報告もある（梅原1944）。

かつおぶし形を呈し、下面が上面側にごくわずか反っている。中央に凹みが全周し、くびれを成している。体部両端は、鋭く尖っている。くびれ部断面と体部断面は、橢円形状である。

器面に原礫面を残すところもあるが、全面を研磨して成形しており、擦痕が確認できる。くびれ部は、縦方向の研磨である。使用痕は、確認できなかった。

3は、市指定文化財（建造物）である山中氏邸（志布志町志布志）内の倉庫を平成29（2017）年に整理した際に発見されたものである。詳しい出土地は不明であり、山中氏邸の倉庫にあった由来も不明であるが、志布志町内で発見されたものである可能性が高いと考える。

全長18.8cm、体部最大幅5.9cm、くびれ部幅5.7cm、体部最大厚3.1cm、くびれ部厚3.2cm、重量485.0gを測る。石材は、肉眼観察によれば蛇紋岩の可能性もある。

かつおぶし形を呈し、下面が上面側に湾曲している。体部両端は尖らずに丸味を帯びる。中央上面のみに凹みがあり、くびれを有する。

くびれ部断面・体部断面ともに橢円形状で、上面側が鋭く尖る。全面を研磨して成形しており、擦痕が確認できる。使用痕は、確認できなかった。

独鉛状石器は、島津義昭氏や後藤信祐氏によって分類されている（島津1975・後藤1985）。両氏の分類にあてはめると、1・3は島津分類の「b-b’類」（全長20cm以上で、中央上面に抉りまたは凹部をもつもの）、後藤分類の「A-5類」（体部断面が円形または橢円形を呈し、両頭部先端が鋭く尖るもので、反りを有するもの。中央背部に抉りのみを有するものも含む）に相当する。2は島津分類の「b-a’類」（全長20cm以上で、くびれ部に全周する溝をもつもの）、後藤分類の「A-5類」に相当する。

なお、「b-b’類」は「九州型独鉛状石器」と呼称されている（島津1975）。また、1～3類は「西日本型独鉛状石器」（渡辺1973）と呼称してきたものである。

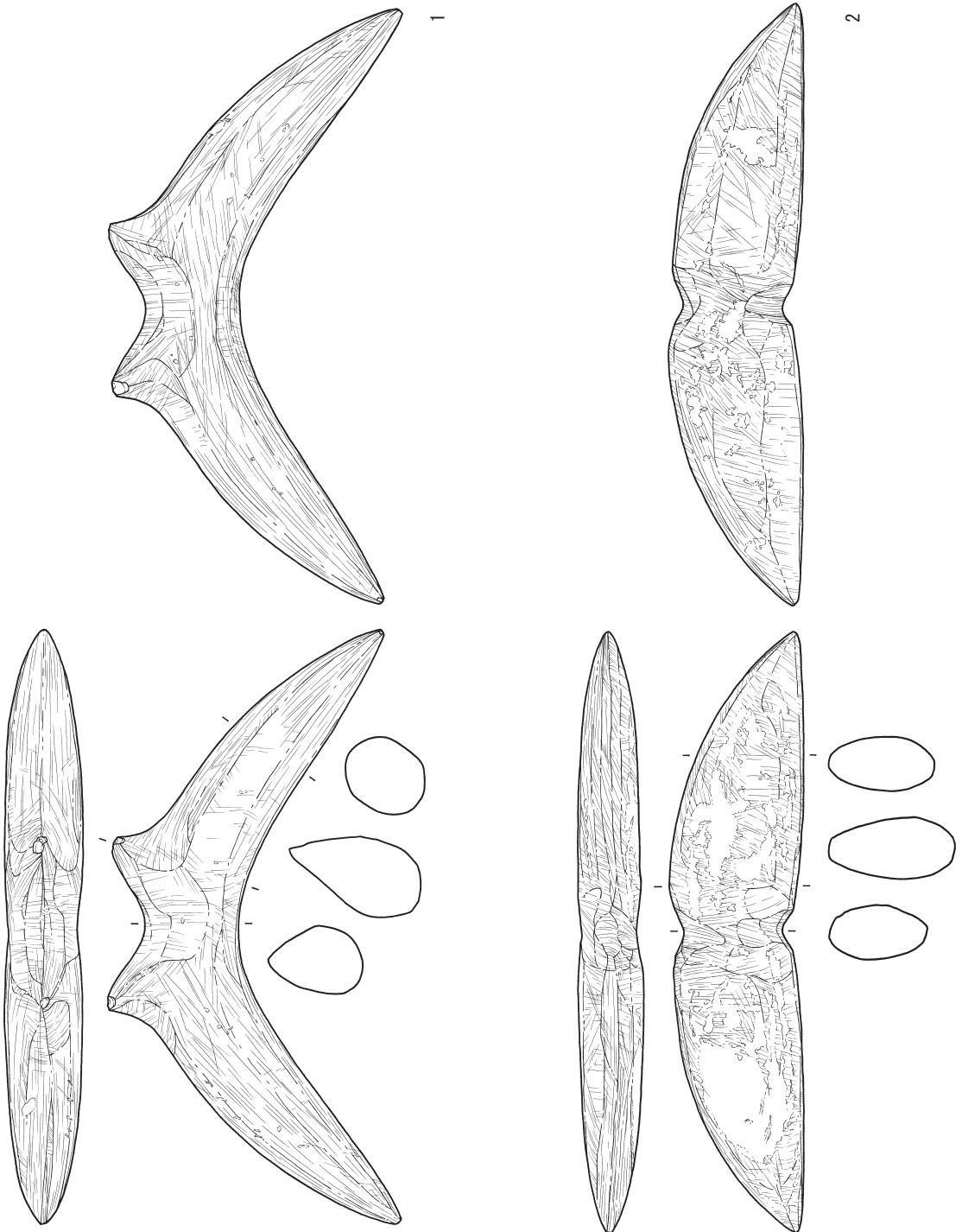
西日本の独鉛状石器について、島津氏は縄文晚期～弥生前期のものとし、後藤氏は縄文晚期前葉に位置づけ、岡本孝之氏は縄文後期～弥生中期のものとする（岡本1999）。一方、東和幸氏は発掘調査事例から、縄文中期のものと考えている（東1993・2001）。

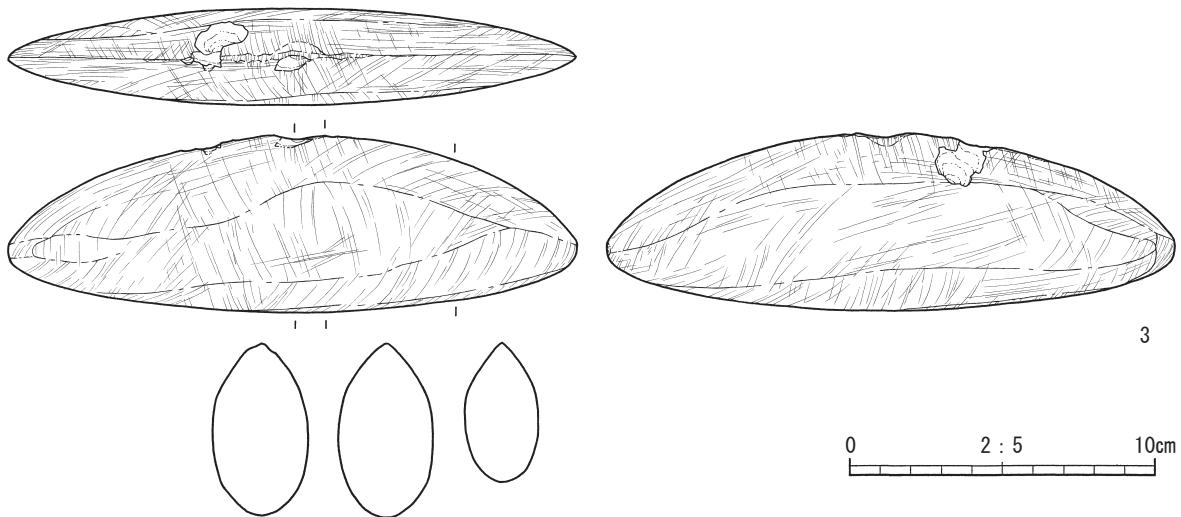
出口A遺跡資料は採集資料であり、正確な年代的位置づけは困難である。

ところで、独鉛状石器には「弥生土器」がともに出土したとされている（梅原1944）。梅原末治氏による論文に掲載された実測図からは、古墳初頭～前葉の中津野式と判断できなくはないものの、縄文後期の中岳I式には「く」字状に外反する口縁部や上げ底状を呈する底部もあることから、出土土器が中岳I式の可能性もあり得ること、そして近隣の出口B遺跡の調査において中岳II式が出土していることも併せて考えると、出口A遺跡資料が縄文後期後半の中岳I式～中岳II式土器期に位置づけられることが指摘されている（相美2014）。

第94図 市内の獨鈍状石器（1）

0 2:5 10cm





第95図 市内の独鈷状石器（2）

出口A遺跡出土の独鈷状石器に関しては、小林青樹先生から多大なるご教示をいただいた。記して感謝申し上げます。

#### 【引用・参考文献】

- 梅原末治 1944「大隅発見の異形石器」『人類学雑誌』59—7  
日本人類学会
- 岡本孝之 1999「遺物研究 独鈷状石器（独鈷石・白河型石器）」『縄文時代』10 縄文時代文化研究会
- 遠部慎 2001「九州石刀・石剣小考」『唐澤考古』20 唐澤考古学会
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2004『九養岡・踊場・高篠坂遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（71）
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005『大坪遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（79）
- 河口貞徳 1982「鎌石橋遺跡」『鹿児島考古』16 鹿児島考古学会
- 工藤洋男 1985「近代土地改良の源流—富田甚平の業績—」『農業土木学会誌』53—5 農業土木学会
- 黒川忠広 2005「指宿式土器の色調から見た交流の断片」『縄文の森から』3 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 黒川忠広 2014「石器石材としての大川原産珪質頁岩」『縄文の森から』7 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 後藤信祐 1985「独鈷状石器小考」『唐澤考古』5 唐澤考古学会
- 後藤信祐 2007「刀剣形石製品」『縄文時代の考古学』11 同成社
- 相美伊久雄 2014「志布志周辺の縄文時代研究」『平成26年度鹿児島県考古学会秋季大会発表要旨集』鹿児島県考古学会
- 相美伊久雄 2017「大平式土器再考 一東南部からみた九州縄文時代中期後半期の様相」『鹿児島考古』47 鹿児島考古学会
- 寒川朋枝 2009「鹿児島県における縄文時代の漁撈具」『九州における縄文時代の漁撈具』第19回九州縄文研究会長崎大会発表要旨・資料集 九州縄文研究会
- 志布志町教育委員会 1979『野久尾遺跡』
- 志布志町教育委員会 1979『別府（石踊）遺跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書（3）
- 志布志町教育委員会 1984『倉園B遺跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書（7）
- 志布志町教育委員会 1985『中原遺跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書（9）
- 志布志町教育委員会 1985『倉園A・土光・風穴遺跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書（10）
- 志布志市教育委員会 2018『次五遺跡』志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書（13）
- 島津義昭 1975「西日本の独鈷状石器」『九州考古学の諸問題』福岡考古学研究会
- 庄司英信・守島正太郎 1948「九州地方における暗渠排水の今昔」『農業土木研究』16巻1・2号 農業土木学会
- 末吉町教育委員会 1980『中岳洞穴』
- 高原町教育委員会 2022『井ノ原遺跡第1地点』高原町文化財報告書（25）
- 東和幸 1993「独鈷状石器」『大河』4 大河同人
- 東和幸 2001「九州地域（熊本県・宮崎県・鹿児島県）の概要と集成」『縄文・弥生移行期の石製呪術具2』
- 藤木聰 2009「打欠石錘の用途と切目石錘の来歴」『九州における縄文時代の漁撈具』第19回九州縄文研究会長崎大会発表要旨・資料集 九州縄文研究会
- 松山町教育委員会 1986『前谷遺跡』松山町埋蔵文化財調査報告書（1）
- 松山町教育委員会 2005『山ノ田遺跡発掘調査報告書』
- 宮崎市教育委員会 2019『樋ノ口遺跡』宮崎市文化財調査報告書（126）
- 宮田栄二 2002「鹿児島県の非黒曜石原産地について」『Stone Sources』1 石器原産地研究会
- 三輪晃三 1998「第5章 南九州縄文後期再論」『鹿児島県桜島町武貝塚発掘調査研究報告書』奈良大学文学部考古学研究室調査報告書（第16集）
- 山岸良二 2000「「独鈷石」形態地域論II—「西日本型独鈷状石器」再考—」『人類史研究』12 人類史研究会
- 渡辺誠 1973「大阪府高槻出土の独鈷状石器をめぐって」『考古学論叢』2 別府大学考古学研究会